

【親鸞部門・奨励賞】

かけがえのない日常

大谷高等学校 第1学年 藤本 のどか

私が「ってきます。」と言うと、私の家族は必ず「いってらっしゃい。」と返してくれる。この、みなが普段当たり前にする行動をとる時、私は必ず、小学校の先生がしてくれた話を思い出す。

その話は、先生のとある友人が経験した実話であった。その友人が、ある夜、奥さんと些細なことで喧嘩してしまい、解決しないまま寝てしまった。次の日の朝、まだお互い腹を立てていたため、一言も話さないまま、会社に向かったそう。しかし、その日買い出し中の奥さんは、交通事故に遭い、亡くなってしまった。その友人は、「奥さんとの最後の会話が、喧嘩で終わってしまったことを酷く後悔している。」と、泣きながら先生に話したらしい。

私はまだ小学生だったので、帰って来た時に、家族が亡くなってしまっているという状況を、想像したことがなく、幼心にその話がとても印象に残った。そして、「ってきます。」「いってらっしゃい。」という、なにげない挨拶が、いかに大切で、かけがえのない物なのかを初めて知った。それから私は、前日にどれだけ喧嘩したとしても、必ず出かける時には、「ってきます。」と、家族に言い、逆に家族が出かける時には、必ず「いってらっしゃい。」を言い、玄関まで行くようにしている。

このなにげない家族との挨拶や、やりとりができる日常は、普段当たり前と思いがちだが、これこそが、とても大切で、かけがえのない私の宝物である。